慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ハイデガー「根拠の命題」 |
| Sub Title | Heidegger "Der Satz vom Grund" |
| Author | 立野, 清隆(Tateno, Kiyotaka) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1965 |
| Jtitle | 哲學 No.46 (1965. 2) ,p.125- 141 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | Nihil est sine ratione (Nichts ist ohne Grund), lautet der Satz vom Grund. Was er aussagt, bleibt als unauffallig Gelaufiges im Umlauf des menschlichen Vorstellens. Dagegen hat Leibniz den Satz vom Grund aus seinem gleichgultigen Zustand heraus -und zu einem obersten Grundsatz zusammengerissen. Leibniz brachte den Grundsatz in die strenge Fassung des principium reddendae rationis sufficientis. Kurz gesagt : nihil est sine ratione. Wir konnen jedoch den Ton such so legen : Nihil est sine ratione. Der Ton hat sich vom "Nichts" auf das "ist" und vom "ohne" auf den "Grund" verlagert. Das Wort "ist" nennt stets auf irgendeine Weise das Sein. Die Verlagerung des Tones lasst uns einem Zusammenklang von Sein und Grund horen. Die neue Tonart enthullt den Satz vom Grund als einen Satz vom Sein. Sein und Grund gehoren zusammen. Aus seiner Zusammengehorigkeit mit dem Sein als Sein empfangt der Grund sein Wesen. Umgekehrt waltet aus dem Wesen des Grundes das Sein als Sein. Grund und Sein (ist) das Selbe, nicht das Gleiche. Sein (ist) im Wesen : Grund. Darum kann Sein nie erst noch einen Grund haben, der es begrunden solite. Demgemass bleibt der Grund vom Sein weg. Der Grund bleibt ab vom Sein. Im Sinne Solchen Ab-bleibens des Grundes vom Sein "ist" das Sein der Ab-Grund. Insofern das Sein als solches in rich grundend ist, bleibt es selbst grundlos. Das Sein fallt nicht in den Machtbereich des Satzes vom Grund, sondern nur das Seiende. Sein und Grund : das Selbe. Sein : der Ab-Grund. Es gilt, die Einstimmigkeit beider "Satze", der Satze, die keine "Satze" mehr sind, zudenken, und in den Bereich des Sachverhaltes, den der Satz vom Grund als Satz vom Sein sagt, zu gelangen. |
| Notes | 橋本孝先生古希記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000046-0133 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ハイデガー「根拠の命題」

立　野　清　隆

Nihil est sine ratione. 通常根拠律と呼ばれている此の命題，即ち「如何なるものも根拠なしには存在しない」という此の命題が，普通云い習わされている簡単な様式に於いて把握され命題として初めて語り出されたのは，17世紀ライプニッツによつてである．此の単純なる命題が命題として定立されるに至るまで西洋的ヨーロッパ的思惟はその原初より2,300年の歳月を要したのであり，此の長い期間は此の命題の休眠期と名付けられて差支えないであろう．此の身近な，人間の凡ての表象作用と挙措態度とを如何なる処に於いても支配し貫徹している此の命題は，一体何処でそして又如何なる仕方でかくも長い期間そつと鳴り初め乍ら睡んでいたのであるのか．それは身近に存する分り易い簡単な事柄への我々の関係が何時の間にか鈍くなり痳痺し，かくて身近な事に至る道は，我々人間にとつては何時でも最も遠い道であり，その故に又最も困難な道であるからである(s. 16)．それでは一体根拠の命題の様な内容空虚な命題について心を煩わして何になるのであろうか．我々は此の命題を立ち処に理解し得，概念的に更に立入つて把握されるべき何ものもないし，況んや直観的に手に取り得る様な何ものも存しない．「然しそれにも拘わらず根拠の命題は，恐らく可能な限りでの凡ての命題中最も謎に満ちた命題である」(s. 16)．

Nihil est sine ratione. 此の命題の持つ二重否定を肯定形式によつて置き換えれば，Omne ens habet rationem となる．通常或る命題の否定形式よりも肯定形式の方を優れりとするが，根拠の命題に関しては事情は別である．即ち根拠の命題は事実の単なる確認でもなければ，又例外を許容す

る如き如何なる一般的規則でもなくして，或る必然的なる事態，即ち存在するものは如何なるものでも凡て必然的に根拠を持つているという事態を，「無しに……ない」という二重否定によつて，不可避的なる事柄として語つているのである．それ故根拠の命題は肯定形式よりも否定形式の方がより明晰であるということが出来る．此の命題はそこから我々が離れ去ることの出来ない事柄，或る背き得ない所謂原則的なる事柄を語つて居るのであつて，根拠の命題は凡ての根本命題中の根本命題，一切の根本命題中の最上位の，即ちその順位から云つて第一の根本命題であるということが出来る．

同一律・矛盾律・排中律・区別律（不可弁別者同一の原理）等と云つた，人間の凡ての表象作用に方向と規準とを与えている之等幾つかの根本命題中，通常最上位の根本命題と看做されているものは同一律で，人は屢々之をA＝Aという公式に於いて捉えている．然しA＝A（AはAに等しい）という相等性 Gleichheit は同一性 Identität とは或る別な事柄である．即ち「同一性とは同一なるものの中に於ける相異なるものの相互所属性 Zusammengehörigkeit を意味し，より明瞭には同一なるものの根拠の上で相異るものが相互に所属し合うことを意味する」(s. 22)．此処では同一なるものは相互に所属し合うことの根拠としての働きを演じ，同一性の内には，その上で且つその中で相異るものの相互所属性が基づいているところのものとしての根拠の性格が語られている．同一性の命題はかくて根拠の命題の中で根拠づけられ得る可能性を有つが故に，根拠の命題こそ一切の第一の根本命題中，最高の根本命題であるということが出来るであろう (s. 22)．

然し根拠とは一体何であるのか．奇妙なことには根拠の命題は，根拠を根拠としては決して取り扱わず，一般に根拠とは何であり，根拠の本質は何に存するかということを既に前提して，凡ゆる存在者は必然的に或る根拠を持つと云つているのである．結局根拠の命題は存在者についての命題

であつて，存在者をその根拠という方向に向つて見て居り，根拠を根拠としては決して取り扱つていないのである．然し又根拠の命題も一箇の命題としてそれ自身或るものであつて無ではない．それ故此の命題は，此の命題自身の言明に従つて，それ自身自ら根拠を持つていなければなるまい．然らば根拠の命題の根拠とは一体何であり，その根拠を何処に持つているのであるのか．若し根拠の命題は，その命題の語つていることの妥当しない唯一の或るものであるとすれば，正しく根拠の命題丈けが此の命題自身の妥当境域から脱落し，根拠の命題は根拠なしにあることになるであろう．又根拠の命題も必然的に根拠を持つているとすれば，かかる根拠は，諸他の多くの根拠と同列的な一つの根拠に止まり得ず，凡ての根拠中最も卓越した根拠，つまり根拠の根拠と云つた様なものになるであろう．そして根拠の根拠へと向う歩みは止めどもなくそれ自身を超えて，根拠の根拠の根拠へと押し寄せてゆくことになり，我々の思惟は底無しの無根拠へと墜落せざるを得ないであろう (s. 28).

ライプニッツは根拠の命題を principium grande (大原理) 即ち一つの巨大な支配力を持つ原理 ein großmächtiges Prinzip と呼んでいる．彼は根拠律 principium rationis について次の様に云つている．Nihil est sine ratione seu nullus effectus sine causa. (如何なるものも根拠なしには存在せず，若しくは如何なる結果も原因なしには存在しない)．此処では明らかに根拠の原理と因果性の原理とが等置されて居り，之に対する一般の非難も亦正しいのであるが，然し之迄述べて来た Nihil est sine ratione という簡単な様式に対して，真正にして厳密なその故に唯一の決定的なる様式として，彼の後期の一論文の中で次の様に語つている．duo sunt prima principia Omnium ratiocinationum, Principium nempe contradictionis .... et principium reddendae rationis. (凡ての論証作用の為の第一原理は二つある．即ち矛盾の原理と……返し与えられるべき根拠

の原理とである）(Specimen inventorum, Philos. Schriften ed. Gerhardt VII, 309). 此の二番目に挙げられた原理は，凡ての真理に根拠が返還され得ること，即ち如何なる真理の為にもその根拠が返し与えられ得ることを語つている．ライプニッツにとつて principium rationis とは厳密に思惟されるならば principium reddendae rationis である(註). rationem reddere とは根拠を背後へと逆戻つて返し与えること zurückgeben であるが，一体何故にそして又何処へ逆戻つて与えるのであるのか．

一般的に言つて認識に於いては諸々の対象を表象すること Vorstellen (re-praesentatio) が行われて居り，かかる認識的表象作用の内では出会うものが，表象しつつある自我へ向つて（将来的に），そして此の自我へと立ち帰り（帰来的に），かくて此の自我に対して現前せられ一つの現在 Gegenwart の中へと立てられる (s. 45). それ故 principium reddendae rationis（返し与えられ返還されるべき根拠）の原理によれば認識的な表象作用は，自らの内に出会うものの根拠を，表象作用に向つて即ち表象作用へと逆戻つて与えなければならない．認識的な表象作用に於いては認識しつつある自我に根拠が手渡され交付されるのである．此のことを根拠の原理は要求する．ratio とはそれ自身に於いて ratio reddere であり，表象し思惟する人間に絶えず交付され手渡されねばならぬ如きものである (s. 42). 即ち根拠とは何処かにそして何等かの仕方で無規定且つ無関係な在り方に於いて眼前に存在する如きものではない．根拠そのものは根拠として逆戻つて与えれらるべきことを要求している．逆戻つて（繰返して再び）zurück (re) とは繰返し再現しつつある主体即ち表象しつつある主体 (das re-präsentierende, d. h. vorstellende Subjekt) の方向に，然も此の主体を通して主体の為にということである．それ故一切の存在者は根拠の此の要求の領域内に在つては根拠からの一つの帰結として現象し，根拠からの結果として表象されなければならないことになる (s. 54). 即ち根拠づけられた表象作用の中で存立 (Stehen) へと齎らされかくて自らを表現し出

会うものとなつたところのもののみが，確実に存立しているものつまり対象とみなされるのである．此の様に根拠がその都度根拠づける根拠として，表象作用的な主体に手渡され交付されるその時に，表象作用は根拠づけつつあるものである．

根拠の命題の中で力を振つているものは，reddendum（逆戻つて与えられるべし）という根拠の交付を要求する呼びかけである．此の reddendum という呼びかけは人間の凡ゆる表象作用を貫ぬいて力を振つて居り，然も間断なく絶対に背き得ない仕方で近代を貫ぬき，更に我々の現代をも超えて彼方へと支配的に語りかけているのである．然し乍ら principium reddendae rationis はそれにも拘わらず単なる認識の原理ではない．根拠の命題は諸々の命題の必然的根拠づけの根本命題であり，諸々の命題に於いて陳述される凡ての認識作用を徹底的と支配し導き担つているのであるが，然し此の原理は単に認識作用にのみ妥当するのではなくて，何等かの仕方に於いこ存在する一切の存在者にも亦妥当するのである．認識作用は一種の表象作用（vor-stellen）であり，此の立てる（stellen）という働らきの中で存立へと齎らされて出会うものが対象（Gegenstand）である．それ故表象作用とそれによつて表象されたもの，対象とは根拠づけられたものでなければならない．即ち或るものが「ある」のは，或る根拠づけられた表象作用がその或るものを表象作用に対して，その対象として確立したその限りに於いてであるが故に，根拠の原理は単に認識の最高の根本命題であるのみならず，同時に認識の対象の最高根本命題でもある．「存在すると云われる凡てのものは……の帰結として存在しそれ自身或る根拠の帰結であり，即ちそれは principium reddendae rationis としての根拠の命題の中での呼びかけが語つている或る根拠の交付を要求する呼びかけの帰結であり，此の呼びかけに従つてある」(s. 54).

（註）ライプニッツは厳密に然も完全に思惟された根拠の命題を principium reddendae rationis sufficientis (vgl. Monadologie § 32) と表現している．

ハイデガーは之を「権能的な根拠の命題」(der Satz vom zuständigen Grund) と呼んでいる. zuständig とは或る事物に対して決定権があり，或る事柄に責任を持ち之を弁明し得ると共に絶えず表象作用に帰属することを意味し，事物と表象作用とを共に可能ならしめることである. 根拠の命題の suffectio (充足する) という規定の背景には perfectio (完全性) という表象が存して居り，それは或る一つの対象が存立する為の諸規定が完全に備わつていること，対象の可能性の諸制約の完全性，対象の諸根拠の完全性によつて始めて対象が徹底的に確立され完成することを意味している. 即ち充足するということは対象の完成ということによつて要求され規定されている (s. 64).

根拠の命題のライプニッツ的形式の検討によつて，根拠には交付を要求する呼びかけ即ち reddendum という性格の属することが明らかにされた. 然し一体何処から根拠の此の呼びかけは生じ，誰が若しくは何が凡ての表象作用の内で且つその表象作用の為に，諸根拠の交付を要求する呼びかけを立てているのであるのか. それは根拠の命題の支配下に自らに固有の表象作用を遂行している我々人間であるのか. それとも又根拠それ自身が，それ自身から根拠として此の様な要求を我々の表象作用に向つて立てているのであろうか. 然し如何にして根拠は要求 (呼びかけ) というものを立て得るのか. 之等の問は只，根拠の本質が何処に存するかを我々が十分明らかに知り，根拠の本質を問う道の上で人が Grund とか ratio とかと名付けているものが一体何であるのかを聞くに至つた時にのみ答えられ得るであろう (s. 74). 然るに根拠の命題は根拠の本質については何も述べてはいない. 根拠の命題は確かに根拠について語つてはいるが，然しそれにも拘わらず根拠としての根拠，根拠そのものについての如何なる陳述でもない. 然らば一体根拠の命題は何について陳述しているのであるのか. 此の命題の主語は何であり述語は何であるのか.

Nihil est sine ratione. 此の命題の平坦な調子の中に我々は二つの相異なる音調性の鳴り響いているのを聞くことが出来る. 即ち

（1） *Nihil* est *sine* ratione. 如何なるものも根拠なしには存在しない.

（2） Nihil *est* sine *ratione*. 如何なるものも根拠なしには存在しない.

我々が第一の音調性—それは通常の調子であるが—に注意する時根拠の命題の主語は根拠ではなくて「如何なる存在者も」であり，それ故此の命題は通常の様式に従つて理解される時は，根拠についての陳述ではなくして，存在者がその都度存在者である限りに於いて存在者についての陳述である (s. 82) (Vom Wesen des Grundes, 3 Auflage. s, 9). ところで然し思惟は本来聞くこと (Er-hören) であり且つ見ること (Er-blicken) である. それ故思惟が聞きつつ見，見つつ聞く時，聞かれ得るものが同時に見られ得るということも亦全くの法外なことではないのである. そこで我々が「如何なる存在者も根拠なしには存在しない」という第二の音調性，即ち nihil から est へ，sine から ratio へと強調を転換し，est と ratio との諧和音を聞きつつ熟思する時，一体何を見て取ることが出来るのであろうか. Nihil *est* sine *ratione*. 此の est（ある）は仮令全く漠然とした無規定の仕方に於いてであるとは云え，その都度存在しているものの存在 (Sein) を名付けている. 即ち根拠のの命題は此の新しい音調性に於いて聞かれるならば，存在するものの存在には根拠という様なものが属していることを語つている. 根拠の命題はかくて存在者についての陳述であるのみならず，むしろ存在者の存在について語つている.「根拠の命題は存在には根拠という如きものが属している. 存在は根拠性格的（グルンドアルテイヒ）であり根拠作用的（グルンドハフト）である」ことを語つている (s. 90). 然し「存在は根拠（作用）的である」という命題は，「存在は或る根拠を持つている」，即ち存在は根拠づけられてあるということを決して意味するものではなくて，「存在は本質的に根拠づけつつあるものとしてある」ことを意味し，此のことの帰結として初めて存在者はその都度自らの根拠を持つのである. 根拠の命題は存在の命題で

あり存在についての一つの言葉 ein Sagen vom Sein である.

ところで然し根拠が存在の本質に属しているとするならばそれは一体如何なる意味に於いてであるのか.「存在と根拠とは相互に所属し合う. 存在としての存在との此の相互所属性から根拠は自らの本質を受取っている. 逆に又存在としての存在は根拠の本質から存在者を支配している」(s. 92～93).「根拠と存在とは同一のもの <である> が相等しいものではない. 存在は本質に於いて根拠<である>. それ故存在は存在を根拠づけるべき更にもう一つの根拠を決して持ち得ない. 従つて根拠は存在から脱落し wegbleiben 離れ去つて abbleiben いる. 根拠が存在から此の様に離れ去つているという意味に於いて存在は深淵的な脱一底(無一根拠) Ab-Grund <である>. 存在が存在として自らに於いて根拠づけつつある限りに於いて存在それ自身は無根拠に止まつている. 存在は根拠の命題の支配領域に属さず, その支配領域に属するものは只存在者だけである」(s. 93).

我々が或るものについて「それはある」「それはこれこれである」と語る時, そのものは存在者として表象されている. 即ち存在者のみがある (ist) のであつて「あること」(ist) 自身, 即ち存在 (Sein) は「ある」(ist) のではない. 従つて ist と Sein とに関しては或る独自なる事態が成り立つて居り, 此の独自な事態に注目する時, 先に述べた存在の命題としての根拠の命題, 即ち (1)「存在と根拠とは同一<である>. Sein und Grund ≪sind≫ das Selbe. (2)「存在は脱一底<である> Sein ≪ist≫ der Ab-Grund.」と語ることは許されない言い方である. それは存在に関わつてゆかないし, 存在に固有なものへ到達しないのである. それ故ハイデガーは此の両命題を (1) Sein und Grund: das Selbe. (2) Sein: der Ab-Grund. と表現し, 此の最早や命題とは云えない両命題の一致して発する一つの声を思惟しようと試みる (s. 93～94).

根拠の命題の通常 (第一) の音調性から第二の音調性への転換は突如と

した転換であり，音調性の此の様な転換の背後には思惟の或る飛躍が秘められている．その飛躍は思惟をして橋なしに即ち前進の連続性なしに，或る全く別な境域と云い方との内に齎らすのである．根拠の命題はかくて最上位の根本命題として Satz であるのみならず，それは又或る一つの飛躍であるという卓越した意味に於ける跳躍 (Satz) である．即ち根拠の命題は此の様な跳躍という意味での命題として，存在の本質の中への跳躍である．それ故根拠の命題は存在についての命題ではなくして，存在としての存在，即ち根拠としての存在の中への跳躍である (s. 96)．飛躍は思惟を存在者についての最上位の根本命題としての根拠の命題の境域から，存在としての存在について語つている或る一つの云い現わし Sagen の内へと齎らすのである．

我々は根拠の命題を二様の仕方で，即ち (1) 存在者についての最上位の根本命題として，(2) 存在の命題として聞くことが出来る．第二の場合には我々は根拠を存在として，存在を根拠しとて思惟することに指し向けられる．此の様な思惟は存在を最早や或る存在者によつて説明するのではなく，存在を存在として思惟せんと試みることに他ならない．ところで然しかかる思惟の内へ入つて行く道は，根拠の命題を存在の命題として聞くことに他ならない．我々が此の様な仕方で聞くことの道に到達するのは只或る一つの飛躍 Sprung によつてのみである．

飛躍は或る一つの飛躍の領域から離れ去つて行くのであるが，然しその領域を只単に背後に放棄するのではなく，飛躍によつて此の領域を或る新しい仕方で然も副次的にではなく必然的に取り返すのである．かくて飛躍は本質的に振り返つて見る飛躍である．思惟は飛躍の中で回想 Andenken になるのであり，然も過ぎ去つたものへの回想ではなくして本来既にあつたもの das Gewesene への回想となるのである．ところで飛躍の領域とは西洋的思惟の歴史であり，此の思惟の歴史の内にあつては，存在は存在者の存在として或る一定の仕方で前面に現われて来ている．存在は決して

人間の表象作用によつて初めて定立されるものではなく，存在は明らめつつ存在者としての存在者に或る一つの Zeit-Spiel Raum（時—戯—空）を空け整えることによつて，自らを人間に交付し手渡すのである．存在は本質的にかかる Geschick（命運）として，即ち自己顕現としてと同時に自己隠蔽として存続する．西洋的思惟の歴史は存在の命運の中に安らつている（s. 108, 109, 129, 130）．我々が飛躍からして西洋的思惟の全体を振り返つて見，そしてそれを存在の本来既にあつた命運として回想しつつ保持するならば，その時始めてそしてその場合にのみ西洋的思惟の歴史は存在の命運（ゲツシク）として明らかになる．それと同時に我々が，既に命運として経験された存在の歴史から語る場合にのみ我々は飛躍を準備することが出来る．

飛躍は只回想的な飛躍としてのみ飛躍である．回-想 An-denken, 即ち本来既にあつた命運を回想することは，本来既にあつたものの中で未だ尚思惟されなかつたものを思惟されるべきものとして熟思することであり，思惟は先-思 Vor-denken する思惟としてのみ之に呼応することが出来る．本来既にあつたもの das Gewesene を回-想することは，思惟されるべくして思惟されなかつたものの中へと先思することである．思惟とは回想しつつ先思することである．回想しつつ先思する思惟は常に新たに然も益々根源的に飛躍を遂行することであり，そこには如何なる取り返しもなければ又如何なる回帰も存しない．思惟は存在としての存在の中へと回想的に先思しつつ，自らを存在の真理から或る別の言い現わし（Sagen）へと変じて了うまで飛躍を必要とするのである（s. 158～159）．

第二の音調性に於ける根拠の命題は存在（ザイン）と根拠（グルント）との諧和音を鳴り響かせ，此の命題は今やそれが語るところのものを此の諧和音から語つている．即ち存在と根拠とは相互に所属し合い存在と根拠とは本質に於いて同一（ダス・ゼルベ）である，と．然し存在と根拠とは如何にして相互に所属し合い又同一であるのか．第二の音調性の中で根拠の命題は存在の言い現わし（Sagen）

として何を語つているのであるのか.

ところで我々の言葉は常に歴史的に語つて居り，存在のその都度の命運(ゲシック)によつて言葉は常に整えられ適合されている．即ち言葉が語るのであつて人間が語るのではない．人間は命運的に言葉に呼応することによつてのみ語る．此の呼応は然しそれによつて人間が存在の明るみの中へ帰属するところの本来的なる在り方である．それ故一つの言葉の持つ多義性は人間の恣意から生ずるものではなくて，それ自身歴史的な多義性である．即ち言葉を語るということの内で我々人間が常に存在の命運に従つて，存在者の存在からその都度違つた仕方で意味され呼びかけられているということから発生して来るのである (s. 161). 扨てそれでは一体如何なる点に於いて存在の歴史の始源の内で，存在と根拠との同一性が告知されて居り，然もそれ以後は長い時代に亘つて，此の様な同一性が同一性としては最早や思惟されない儘になつているという仕方に於いて告知されているのであるのか.

先づ Grund とは全体的に思惟されるならば，一層低い処に横えられていると同時に一層深い処でその他のものを担つている領域を意味する．それ故 Grund とは，その上に或るものが安らい，そこに於いて或るものが横わり，そこからして或るものが帰結して来る処であるという点に於いて，我々がそこへと降りて行きその上へと立ち帰つてゆく処を意味している．然し Grund とは ratio の翻訳である．然るに本質的なる翻訳は単なる解釈であるのみならず，伝承としてそれは存在の命運の或るエポックに対応する歴史の最も内的な運動に属している．それ故 Grund が名付けている処のもの，従つて又根拠の命題がそれについて語つている処のものは，理性にして根拠という ratio の二重にして統一的なる言い方の中で経験され思惟されている処のものを伝承する.

ratio とは動詞 reor (と思う，と考える) に属して居り，reor とは広い意味での計算すること (rechnen) である．然し計算は計算するという働き

と共に計算されたもの，算出された理由をも意味し，例えば理由を述べ弁明する (Rechenschaft ablegen) という云い方をローマ人は，「理由を返済する」rationem reddere と云う．「或る事柄や或る行為に際して何に関して又何を目標にして計算されたかということが，計算書と釈明書の中で提示されるという点に於いて，此の reddere ということは必然的に ratio に属している」(s. 168)．かくて principium rationis が principium reddendae rationis であることは ratio それ自身の本質の内に存する．釈明として ratio は自らに於いて一つの reddendum である．

補備　存在がそれ自身をその都度存在の一つの命運として明らめ開くのに対応して，ratio も亦その都度の命運的刻印を帯び，従つて ratio の本質に属する reddendum，即ち rationem redddere の種類と意味も変動する．それは古代ギリシヤ人と古代ローマ人とライプニッツの場合とではたとえ夫々同一の言い廻しであつても，然し正しく此の同一なるものが存在の歴史に於いて或る仕方で変動したのである．即ちライプニッツに於いては reddere ということは，自己自身を確知する主体として規定される表象的自我に関係づけられて居り，かかる自我によつて遂行されている．ライプニッツは reddendum の中に，ギリシヤ的人間は勿論ローマ的人間にとつても知られなかつた命運的に別な或る呼びかけを聞いている．即ちここでは ratio は，凡ての存在者の為にその存在に関して基準決定的な且つ支配的な要求であるところの principium であるからである．その要求は存在する限りの一切のものを存在者として算出する汎通的な計算の可能性の為の釈明の交付を要求している．即ち reddendum の内には数学的技術的に計算可能な諸根拠の交付を呼びかける，無制約的貫徹的な要求の契機，つまり全面的合理化ということが存している．ratio sufficiens 即ち本来的且つ唯一の十分なる根拠，summa ratio 即ち汎通的な計算可能の為の，宇宙の計算の為の最高の釈明(理由)，それは神 (Deus, Gott) である．「神が計算する時世界は成る」(cum Deus calculat fit mundus.)．

ratio は広い意味での計算，即ち人が或るものの許で或るものと共に或るものを目指して計算することで，それは数学的計算に限られない．計算するとは或るものを或るものへ向けて合せ整え或るものを或るものとして

表象することである．その都度或るものが何かとして表象されるところのものは下に立てられたもの das Unterstellte（算出されたもの Errechnete）である．下に立てられたものは，或る事柄に関して事態が現に成り立つている通りに成り立つているということが，正に既にそれによつて可能となるところのものである．ratio はかくて基底であり地盤であり即ち根拠である．計算は下に置くことの中で或るものを或るものとして表象する．此の様に或るものを或るものとして表象することは自己の-前に-齎らすことであり，その都度前に横わつているものを前に捉える Vor-nehmen ことの中で，それを目指して又それと共に計算されるところのものによつて，或るものが如何に整えられているかということを理解（フェルネーメン）するのである．計算即ち ratio はかかる理解として理性（フェルヌンフト）である．ratio はかくて計算として根拠にして且つ理性である．

然らば一体如何なる点に於いて根拠にして且つ理性である ratio と存在（Sein）とは同一（das Selbe）であり，相互に所属し合つているのであるのか．即ち一体如何なる点に於いて存在は存在として ratio に所属し，ratio は ratio として Sein に所属するのであるのか．此の問は只存在の命運に従つてのみ問われ得るのであり，存在の命運の中へと立ち帰つて思惟することによつてのみ解答され得る．ところで然し存在の命運とは差当つて，我々が西洋的思惟の歴史を貫き通つて行くことの中でのみ経験することが出来る．西洋的思惟はアナクシマンドロスからアリストテレスに至るまでのギリシヤ精神の思惟を以て始まり，その中に存在の命運の始源はそれに適わしい対応と保有とを見出している．それ故我々が Sein と ratio との相互所属性への問と，その問の中で問われている事柄とをギリシヤ的に思惟するならば，その時始めて此の問は我々によつて存在史的に問われるのであり，又始源的に問われるのである．ratio とは λόγος の翻訳語であり，従つて我々は第二の音調性に於ける根拠の命題を，ギリシヤ語で τὸ αὐτό (ἐστιν) εἶναί τε καὶ λόγος.（同一なるものは存在にしてロゴスくで

ある＞）と云う場合に始めて存在史的に聞くのであり，然も同時に始源的に聞くのである．然らば λόγος は一体如何なる点で εἶναι に所属するのか．

εἶναι とは現一在すること（an-wesen）を意味する．Sein とはギリシヤ的意味に於いては蔽われない明らかなものの中で，その内で且つその許で輝き現われること，即ち輝きつつ存続し滞留することを意味する．又 λόγος という名詞は λέγειν（語る）という動詞に属し，λέγειν とは取り集めること，一つのものを他のものへ寄せ置き横えること，つまり或るものを他のものへ向けて整えること，即ち広い意味での計算すること，更に一般的には或るものを或るものへ関係づけることを意味する（s. 178, 180）．λέγειν とはかくて取り集め取り上げ保持し保護しつつあるものとして出現して来るところの，前に横わつているものである．λέγειν と λόγος とは現前しているものをその現前に於いて前に横わらしめることである（s. 179）．λόγος は λεγόμενον として同時に語られたもの，示されたもの，即ち前に横わつているものそのもの，その現前に於いて現在しているもの，即ちその存在に於ける存在者を意味している．かくて λόγος は存在（ザイン）を名付けている．然し λόγος は前に横わつているものとして，即ち基体として，同時にその上にその他のものが横わり基づいている処のものであり，かくて λόγος は根拠（グルント）を名付けている．ロゴスは現前にして且つ同時に根拠であり，かくて存在と根拠とはロゴスの中で相互に所属し合つて居り，ロゴスは存在と根拠との相互所属性を名付けている（s. 179, 180）．

存在（ザイン）とはギリシヤ早期の思惟に於いてはロゴスを意味し，ヘラクレイトスはロゴスという語と共に存在を又プュシスとも名付けている．存在とは取り集めつつ秘めつつ出現せしめることとして，そこからして始めて各々の存在者が取り集められその都度の存在者として出現し，蔽われないものの中へと立ち現われて出て来るところの第一者である（s. 181）．それ自身から-此方へ-出現しそして現在しているものの存在が φύσις と呼ばれる（s. 111）．ロゴスとして存在は，そこからして現前するものが現前して来

るところの第一者（τὸ πρῶτον）であり，そこから発する第一者は，そこからして各々の存在するものが始源し，そこから始源されたものとして支配され続けているところのものである．ロゴスはかくて πρῶτον ὅθεν（そこから発する第一者）へと，即ち ἀρχή（始源）へと，ラテン的ローマ的に言えば principium へと自らを展開する（s. 182）．この様にロゴスにしてプュシスという存在の本質の中に，存在と理性根拠としての根拠との相互所属性が打ち建てられているのである．(註)

存在はその始源的なる名称ロゴスが語つている様に命運的に根拠と同一＜である＞．存在が本質的に根拠としてある限り，存在それ自身は如何なる根拠をも持たない．何故なら如何なる根拠づけも，従つて又自己自身による根拠づけでさえも，既にそれは存在（ザイン）を或る存在者（ザイエンデス）に引き下げざるを得ないからである．それ故存在は存在として依然として無根拠に止まる．存在から根拠は，即ち存在を始めて根拠づける根拠としては離れ去り脱け去つた儘になつている．存在と根拠とは同一＜である＞（Sein und Grund: das Selbe）と共に，存在は無根拠＜である＞（Sein: das Ab-Grund）．存在が根拠づけつつ＜ある＞限り，そしてその限りに於いてのみ存在は如何なる根拠をも持たないのである．

我々が此のことを追思しそしてかかる思惟の中に踏み留まるならば，その時我々は従来の思惟の領域から飛び離れて飛躍の只中にあることに気着くのである．然し我々は此の飛躍と共に底無しの渕に墜落しないであろうか．存在が今や存在者という意味での地盤の上へと最早や齎らされ得ず，従つて又存在者から解明され得ないという点に於いては正にその通りである．然し存在が今や始めて存在として思惟され，その真理から基準決定的なるものとなるという点に於いては否である．即ち「飛躍は思惟を全くの空虚という意味での底無さの中へと転落せしめないのみならず，飛躍が始めて思惟を存在としての存在への対応の中へと，即ち存在の真理への対応の中へと達せしめるのである」（s. 185）．「思惟は此の飛躍によつて，その

上へと我々人間的存在者が据え置かれているかの遊戯の広域（Weite）の中へと達する．人間が此の遊戯の中へと齎らされ，然もそこで賭けられている限りに於いてのみ人間は真に活動することが出来，そして遊戯の中に留まることが出来る」(s. 186)．此処で言われている遊戯，即ちその中で存在が存在として安らつている遊戯は，従来の思惟の仕方によつては表象し得ないいとも高き遊戯，否最高の遊戯であつて，ヘラクレイトスによつて αἰών（世界時間——それはコスモスとして存在の摂理を灼熱する輝きへと齎らすことによつて世界を開き時熱するところの世界である）の内に観取された如き遊戯，即ち世界遊戯を戯れる大きな子供の遊びである．アイオーンと戯れる子供，此の子供は一体何故に遊ぶのか．「それは遊ぶから遊ぶ．何故に (Weil) ということは遊戯の中に消え失せる．遊戯は何故なしにある．それは遊ぶ故に遊ぶ．それは依然として単なる遊戯である．即ち最高にして最深なるものである．然し此の「単なる」は一切であり，一なるもの，唯一のものである．何ものも根拠なしには存在しない．存在と根拠：同一，存在は根拠づけつつあるものとして如何なる根拠をも持たず，無-根拠としてかの遊戯，即ち命運として我々に存在と根拠とをこつそりと手渡すところのかの遊戯を演ずるのである．我々は果して此の遊戯の諸楽章を聞きつつ共演するか否か．そして此の遊戯の中へと我々を結集するか否か．又如何にしてそれをなすのか．之等の問いは依然として問われない儘になつている」(s. 188)．

（註）ロゴスという意味に於ける存在は，取り集めつつ前に横わらしめること (das versammelnde Vorliegenlassen) である．そこでは前に横わるものが明るみへと出て来るのであり，然も前に横わるものは，その他のものがその都度かくかくであつて然らざるものではないということが，その都度それに依拠しているところのものとして明るみに出て来るのである．或るものが存在し，かくあつて別様にあるのではないということがそれに依拠しているところのものは，今述べられたことに責を負つているところのものとして自己を示す．それに責を負つているところのもの，即ち前に横われるものとし

てそこに依拠しているものは αἴτιον と呼ばれる．ローマ人はそれを Causa という語に飜訳し，今日ドイツ語では Ursache と語る．Ursachen も Prinzipien も Gründen という性格を持ち，それらは根拠の本質から生じて来ている故根拠の本質と共に存在(ザイン)に属している．両者（諸原因，諸原理）は爾後ずつと存在者を規定し，存在者についての一切の表象作用を左右するに至るのである．

諸原理と諸原因との支配とその要求とは間もなく，極めて自然的且つ際立つたものとなり，その結果恰も諸原理と諸原因とが始めて然も専らそれら丈けが——何の故に又何処からかは知られずに——存在者をその存在に於いて規定するかの如き外観を呈するに至るのである (s. 182, 183)．更に近代的に（カント）存在が超越論的に対象性として規定され，そして此の対象性が対象の可能性の制約として規定されるならば，その場合存在は云わば可能性の制約と称せられるところのもの，然も理性的な根拠と根拠づけの性格を持つところのものの為に消え失せるのである．

存在はそれ自身を送り渡し空き明らめつつ同時に離れ去つてゆく．存在は存在としては自らを秘めかくしている．即ち存在はロゴスとしての根拠とのその始源的命運的な相互所属性に関してはそれ自身を秘匿している．然し存在の自己脱離ということは此の秘匿ということには尽くされず，むしろ存在は自らの本質を隠蔽することによつて他の別のもの，即ち ἀρχαί. αἴτία, rationes, causae, Prinzipien, Ursachen, Vernunftgründen という形態に於ける根拠を出現せしめている．脱離の中で存在は根拠の之等の諸形態を遺してゆくのであるが，然し之等の諸形態の由来については依然として知られない儘になつている．それにも拘わらず此の知られないものは知られないものとして経験されることなく，却つて熟知された自明なものとして経験されているのである．此の様にして存在は脱離に於いて自らを或る仕方で送り渡して居り，その送り渡しの仕方を通じて存在は自らの本質的由来を，理性的に理解された根拠と原因とそれらの諸形態という，厚いヴェールの背後に秘めかくし隠蔽するのである．　（昭和39年8月）